

MACF礼拝説教要旨

2022年5月29日

【婦人たちの支援と奉仕】

8:1 すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。

8:2 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、

8:3 ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

イエス様の弟子たちの中心的存在は12使徒です。しかし、イエス様に自発的についていく人々もいたり、この箇所によると女性たちも支援者、奉仕者に加わっていたことがわかります。

1) イエス様の奉仕・使命

イエス様は、行く先々で「神の国を宣べ伝え、福音を告げ知らせる」ことをなさいました。

神の国を宣べ伝えるというのは

＊「神がすべての状況を支配しておられることを告げ知らせること」

そして「福音」とは「良いニュース」という意味ですが、

神の国が明確に意識され、もたらされることによる祝福があるということです。

神の国が心に届くということは、神が聖霊によって「義と平安と喜び」

とを人の心にもたらしてくださることであり、その具体的な出来事の一例として悪霊を追い出したり、病気を癒やしたりということがありました。

弟子たちもイエス様のしておられることを「見様見真似で」やっていたはずですが、まだまだ自信がなさそうな状況が別の福音書には書かれています。

彼らの上に聖霊がくだって霊的な力を得ることで、それまでとは違う働きが始まりました。

それまでは、まだまだいわばよちよち歩きの見習いの料理人のような雰囲気がありました。

2) 女性たちの支援と奉仕

当時の社会、イエス様の時代には女性と子供は数字に入れてもらえませんでした。

いわば何をするにしても、それは女性の手柄にはならず、常に男の陰に隠され評価されることは少なかったのです。男尊女卑の世界でした。

ですから、ルカの福音書の中でしばしば女性が登場し、またイエス様の母マリアがクローズアップされていることはとても珍しいことです。

更に、奉仕者、支援者として女性たちの存在が書かれていることもとてもめずらしいのです。

使徒言行録の最初の部分に弟子たちと集い、祈るマリアの名前がでできます。

初期のころ、マリアはきっと集会での指導的役割を果たしていたと思います。

救い主の母として。

しかし著者はすぐに「ペトロ」を主役として、やがてパウロが出てきます。

女性の、いわば働き人の記録はほとんどありません。

女性の役割も存在の評価もとても低く感じられます。

そういう背景を考えても、この箇所に女性たちが支援し、奉仕してもらうことでイエス様の宣教活動は前に進んだという記録はとても重要な意味を持っていると思います。

それらの女性たちは「イエス様によって健康を回復していただいた」人々、あるいは「現実的に人をもてなす」ことの重要性を知っている人たちでした。

3) もてなす心は大きな奉仕の心

ルカ4章にはこんなエピソードがあります。

38 イエスは会堂を立ち去り、シモンのお入りになった。シモンのしゅうとめが高い熱に苦しんでいたため、人々は彼女のことをイエスに頼んだ。39 イエスが枕もとに立って熱を叱りつけられると、熱は去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした。

わたしたちは一般的に教会における「奉仕」を考える場合、「集会」を考え

「集会の中で何ができるか」を考えます。あるいはその「集会の準備のために何ができるか」それらは一つ一つ大切なことだと思います。

それらの奉仕があって教会は保たれてきたからです。
しかし、ここに出てくる奉仕者は「なにか直接宣教活動に関わる」「集会形成を考える」というよりもむしろ、イエス様や弟子たちの奉仕活動を支援する、物質的ケア、互いに助け合いながら「生きるを励ます」役割が中心でした。

シモンのしゅうとめの話にあるように、奉仕の基本は神の祝福を受けて感謝してもてなす心を育てることにあります。
イエスさまに、従った女性たちも同じ心だったと思います。
宿舎の用意をし、必要な品物や食べ物を調達し、どこにいけば安心できる宿があるのかをチェックし。
今なら、全部ネットを使えば、すぐに可能ですが、そもそもどこに行くのか長期的なルートの手配があつたわけではなさそうですから、その日、その日、行く先々で彼らはあれこれ細々としたことを準備しなければなりませんでした。

ということは、これらの女性たちは「イエス様に、そして12使徒たちに「何が必要なのか」「どんな気分でのいるのか」「どのようにしたら、明日への心備えができるのか」などを考え、互いに相談しながら、もてなしの心でイエス様一行を支援していったのです。「細かい心配り」があつたと思います。

教会が「集会」として運営され、日常と違う「集会運営」に心が向いてしまうとどうしても「コンサート企画」「講演会企画」のような雰囲気優先、集まっている個人個人がどのような気持ちでそこにいるのか、本当のところ、彼らに何が必要なのかあまり考えなくなってしまう傾向があります。
人数が増えれば増えるほど、教会の中に孤独を感じる人が増えてしまうことも、皮肉な結果です。
直接的な宣教、直接的な伝道とは言えないかもしれない、「人への支援的心」
「細やかな配慮」「いてくれてありがとうが自然に伝わる雰囲気」それらをどのように深めて行けるのか、それは昔からの重要な課題だったのだと思います。

イエス様は12使徒だけでなく、赦され、社会復帰した女性たちの支援を拒みませんでした。
そういう人たちはイエス様への支援だけでなく、そこにいるだけで、イエス様や弟子たちといっただけで、女性たちから話しかけられたり、質問されたりしたのだと思います。
でも、そういう人たちの存在こそ、人々がイエス様に心を向けるために重要な役割を果たした人たちなのだと思います。。

実はあなたは気づいていないかもしれませんが、あなたがそこに居るだけである人にとっては大きな励ましとなり、慰めとなっていることが多々あります。
「あなたがそこにいる」という意味はそれだけで、本当に大きいのです。
直接的な奉仕活動をしていなくても、あなたが静かにそこにいるだけである人達は大きな慰めを得るのです。あなたの笑顔があれば、さらに大きな影響が広がるでしょう。

そうだとすると、「人と関わる」ことをあまり極端にいやがったりせず、必要に応じてメールで連絡を取り合ったり、Zoomの会に参加してみたり、特別に奉仕者意識を持たずとも、そこにいることの喜びを分かち合うことができたなら嬉しいことだと思います。

「あなたの存在自体が、この社会にとって、大きな奉仕、大きな支援なのです」
祝福がありますように。

MACF礼拝映像はこちらです。
<http://gsmail101.com/r/c/QNKf/yMEw/ZXowu/>
